日刊 動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒280 千葉市要町2番8号（動力車会館）
電話（鉄電）千葉 2935・2936番
（公）千葉（22）7207番

90.4.10 No. 3198

清算事業団労働者の首きりを後押しするJR総連を許すな

動労千葉八四時間、国労七二時間のストライキを頂点に、この一～三月清算事業団闘争が全社会的な問題になりつつ闘い抜かれる中で、清算事業団闘争の高揚に自己の存亡の危機を感じたJR総連革マルは、その組織の総力をあげて清算事業団闘争解体に出てきた。

われわれは、もはやいかなる意味においても労働組合とは言えない、JR総連を弾劾・解体し清算事業団闘争勝利、四、一分割・民営化体制粉砕にむけて、更に全力で闘い抜かなければならない。

"首切り"要求の集会

清算事業団闘争が高揚している三月二八―二九日、JR総連は日比谷野外音楽堂において「広域採用、六ヶ月分上積みに反対し、首切りを要求する集会」を開催するという驚くべき姿をさらけだした。社会党田辺委員会による（これ自体闘う立場から許すことはできないが）「三項目」（①広域採用の実施②三、三一JR採用、同日退職③退職金の上積み）の要求のうち、①項③項を運輸省、清算事業団が実行したことに対しての抗議と称しながら、清算事業団労働者の解雇を要求して集会を行ったのだ。

およそ労組独自の集会など開催することのないJR総連が、言うにことかいて事業団労働者の「解雇」のためにのみ集会を開いたのだ。まさしくここにJR総連の本質があり、それが存在意義でもあるのだ。

思わずストを叫ぶ松崎

更に松崎率いるJR東労組は、三月二九日急拠臨時大会を開催した。

そのスローガンに掲げたのが「運輸省、清算事業団による政治介入絶対反対」というものだ。

清算事業団一五〇〇名の史上まれにみる大量解雇強行と清算事業団闘争の四月一日をこえた永続化に恐怖した政府、運輸省が「広域採用、退職金上積み」で闘争の沈静化を図ろうとするのに対し、JR総連は「政治介入だ」と反発している。

だが政府―国鉄（事業団）当局の先兵として作られてきたJR総連こそが、分割・民営化の強行という「政治介入」そのものの産物ではないのか。

更に松崎は、この大会で「直ちに臨時闘争委員会を設置する。ストライキをもって闘うべき事態である。スト権確立について議論を深める。」などと、首切りを要求するためストライキをもって闘う方針を決定するのである。「労使共同宣言」を結んでいながら、ストライキを絶叫し、しかもその目的が首切り要求というのである。

そもそもJRからストを絶滅するのが、JR総連の目的ではなかったのか、それが解雇撤回ではなく、「解雇要求」のストを叫びたてる、革マル松崎の大錯乱・腐敗は行きつくところまで行きついたのだ。

ストを破りを「制度化」

日刊三一九六号でもあきらかなように、JR東日本とJR総連の結託は、とどまるところを知らない。その頂点にスト破りの「褒章金」がある。

スト破りを強制し「褒章金」を支払う、ここにはスト破りの制度化という、日本のいや世界のどの企業でもなしえなかった不当労働行為の極限が示されている。連合傘下のどの労組でさえもやっていないことを、JR総連は強行したのだ。

不当処分粉砕

このようにJR総連革マルの反労働者的行為の数々は、動労千葉の一二、五ストからはじまった清算事業団闘争勝利、運転保安確立の嵐のような進撃に「四、一分割・民営化」体制が崩壊の危機にひんしたことから、ひきおこされているのだ。

このとりもどしをかけた不当処分、組織破壊を許さず、清算事業団闘争勝利、諸懸案要求の解決にむけて、更に全力で闘い抜こう！

本日　十日
四月二十日

春闘第二波スト
営業協議会全員集会
第二三回動労千葉
臨時委員会
清算事業団激励会
労働者福祉センター